

# The KAZI

1982:JUNE

Yachting Magazine  
First Published in 1932  
No.488

# 6

## 創刊50周年記念特大号

### 特集 堀江謙一の世界

### パンナムウインドサーフィン・ワールドカップ



### ウッドワン・ボート

### 東京と神戸 2つのボート・ショー

嗚呼、浪漫の季節。  
ヨットということばに  
憧憬を抱き、そこに甘美なる香を求  
めていた。昭和7年の海。夢を追う男に  
潮風の似合う女。ヨット史を彩る濫觴は、こ  
こ琵琶湖でも花を開かせた。そして50回目の夏。  
海を友とする男のスピリットは変わっていない。





# この人

## 60周年を迎えた琵琶湖ヨットクラブ会長

# 長谷川英一

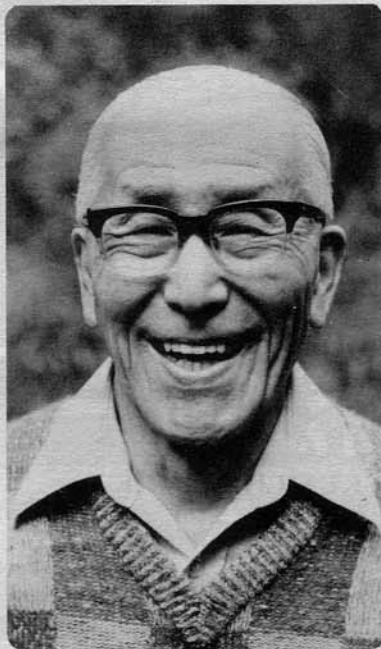
Eiichi Hasegawa-Commodore of Biwako Yacht Club

そのヨット歴は、BYCの歴史とびつたり一致する。「ヨットとともに60年」と自負する所以である。

1922年日本ヨット倶楽部(BYCの前身)を創立した当時、琵琶湖にはいわゆるゲタブネしかなかった。そこで丸善を通して入手した資料を元に〈クングフラウ〉(ノーフォーク型キール・ボート)を建造、さっそく琵琶湖周航に。「そのころはレースなんて考えなかった。たくさん的人数でクルージングするためにピッタリ」だと思っただけで〈クングフラウ〉も、しかしながら走りは今一つ。そのうえ台風にも遭遇したりで、さんざんな周航となった。

その後、一時活動が停滞したが、日本ヨット協会創立(昭和7年)のころ国内5m級、A級ティンギーを次々と進水させ、ルール・ブックを初めて邦訳し、活動再開の基礎をかためた。また、同志社大学、京都大学、阪大ヨット部等の育成にも直接、間接に携わったり、帆走学校を開設したりと、当時のヨット・クラブとしてはきめの細かい普及活動をつづけた。

「京都、近江の人間は進取の気性にとんでいる」と自負する。その表れがA級ティンギーの普及。



「オリンピックに出るために」と国際クラス艇の採用を逸早く提唱、それが「インカレで長い間使われるようになった」ことが誇りでもある。

また、「外国ではクラブ主催の大きなレースがあるのに日本には……」と、10年前から始めた琵琶湖カインド・レガッタでは、ヤードスティック・ナンバー、ゲート・スタート、コンピューターによる成績表作製などという新しい方法をつぎつぎと採用した。

自分自身でも、年に一度は必ずティンギーに乗る。とても80歳とは思えない活躍ぶりだが、健康の秘訣は「歩くこと」。学生時代、京都市内からポート部艇庫まで毎週徒歩で通ったのが教訓になっている。

さて、これからの琵琶湖はどうなるか――

「琵琶湖総合開発の影響で、水位が2mほど下がる。クルーザーに関しては湖北が(クルージング・ポイントとしては)良くなるだろう」、また「喫水の浅い船が必要になる。土地土地に適したヨットを考えねば、和船のように」と若干、憂え気味。

大先輩として若い人たちにアドバイスを――とお願いしたら、

「もっと天候に注意せよ。それに装備をしっかりと」と、現場の警句に終始した。お年寄りにありがちな抽象論はまったくなし。

歯切れのよい、しかも穏やかな80歳の現役ヨットマンである。

2人の息子さん、そしてお孫さんの2人もヨットに乗り、親子三代のセーリング風景も珍しくない。

なお、今年の琵琶湖カインド・レガッタは7月25日、ボードセーリングも大歓迎とのこと。

# BYCの記録から見る 琵琶湖 60年の歩み



〈ユングフラウ〉

●写真及び資料提供／琵琶湖ヨット・クラブ

BYCこと琵琶湖ヨット・クラブが、その前身である日本ヨット倶楽部から数えて今年で創立60周年を迎える。奇しくもヨット協会創立50周年、「舵」誌創刊50周年と重なり、その歴史の深さを改めて感じさせる。そこでBYCの年譜を繰るとともに、当時の貴重な写真をフィーチャーして、琵琶湖60年の動きをながめてみよう。  
(編集部)

ノーフォーク型キール・ヨット (3.5t, 380<sup>ft</sup>) を、大津の桑野造船所で建造し〈ユングフラウ〉と命名する。翌年、同艇に6人が乗り組み、3泊4日の琵琶湖周航を行なう。しかし、その年の8月、浜大津港に係留中、台風のために大破。(「ユングフラウ号修理なりたるも、その後クラブ員氣勢揚らず艇は尾花川地先に陸揚げしたまま雨淋霜打数年自然に朽ちて再び使用に耐えずなりぬ」との記録がある)

その後、メンバーが少ないこともあってしばらく活動が低迷

1922年(大正11年)

日本ヨット倶楽部創立

京都市立第一商業学校(現在の西京商業)ボート部OB有志が集い組織した。メンバーは宮崎晋一、上田健治郎、吉本正雄、安田常保、中塚善助、安田貞一郎、長谷川英一の各氏。この年、スカル3艇、キャットリグ艇1隻を横浜の岡本造船所で建造している。

1924年(大正13年)

〈ユングフラウ〉建造

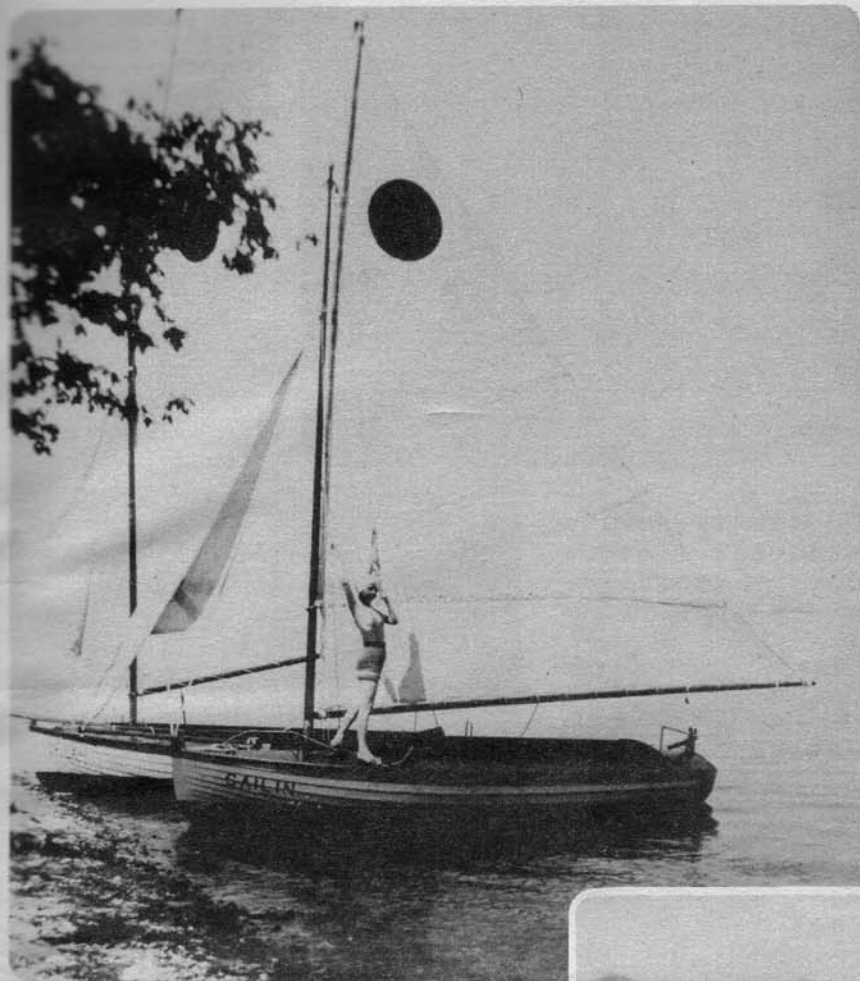
丸善でヨットに関する本(たぶんカーリー博士の帆走理論と戦術集)を取り寄せる際に、同時に入手した図面から、イギリス・



↑日本ヨットクラブ尾花川艇庫

↓5m級のレース風景





琵琶湖に浮いた国内5m級。艇上でポーズをつけている女性は、日活女優の夏川静江さん。日活女優一行が昭和8年に日本ヨット倶楽部を訪問した記念でもある。写真下はその一行、観光船の上で遠めがねを……

するが、1930年（昭和5年）、有志を集い復興を議し、1931年（昭和6年）

大津の井口造船所で、国内5m級2艇〈晴嵐（SAILAN）〉、〈晴朗（SAILO）〉を建造。また、日本ヨット倶楽部尾花川艇庫を建設し、この2艇を格納する

この年、大國寿吉大阪商科大学教授が会長に就任。

また、YRA常任事務局長ヘックストール・スミス氏に依頼してルール・ブックを入手し、吉本正雄、鈴木英の両氏により邦訳する。

1932年（昭和7年）

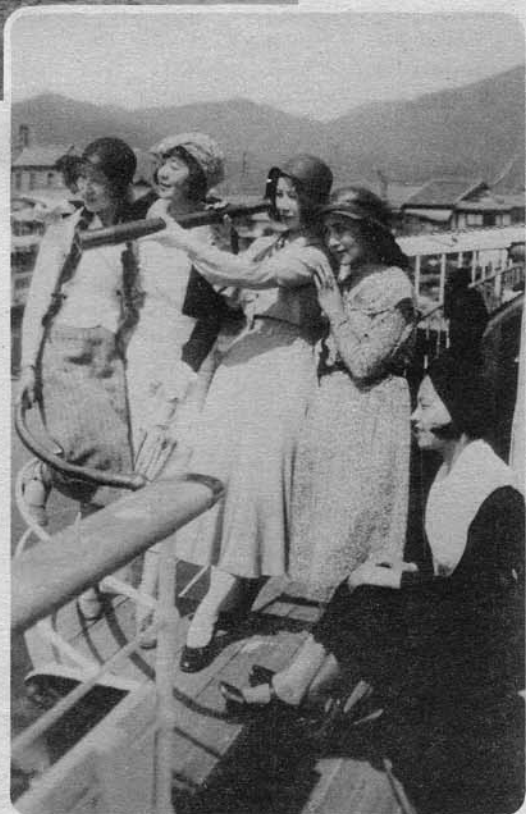
国内5m級〈晴玲（SAILEI）〉、〈晴淋（SAILIN）〉の2艇を大津の桑野造船所で建造する。この頃より、神戸の外人ヨットクラブKRACとの交流が深まり、帆走指導を受ける。また、KRACのメンバー テリー氏が日本ヨット倶楽部の客員となり、瀬戸内海に浮いていたナックル型艇を琵琶湖へ回送した。この艇は、テリーボートと称して、今も艇庫に健在である。

次に、英国RYAより国際12ft級の設計図を入手し、10艇を大津・桑野造船所にて建造する。

またこの年は、日本ヨット協会設立に伴い、クラブ名称を琵琶湖ヨットクラブ（BYC）と改称する。と同時に、11月に西部日本ヨット協会を設立し、大阪毎日新聞本社にて創立総会を開催する。

1933年（昭和8年）

A級12ft艇を10隻建造する。九州帝国大学ヨット部よりの依







⇨大阪毎日新聞本社で開かれた西部日本ヨット協会創立総会。この時の構成メンバーは、日本ヨット倶楽部(琵琶湖)、九大玄界ヨットクラブ(博多湾)、東海ローイングクラブ(伊勢湾)、クレセントヨットクラブ(大阪湾)及び大毎ヨットクラブ、大商大ヨットクラブである

↓10隻の12ft艇のうちの1隻(やくも)

頼で2艇を分譲する。この年に、同志社大学ヨット部がBYC内に創立し、BYC艇を使用し練習を始める。また、西部日本ヨット協会が主催し、BYCの協力の下、西部日本ヨット選手権大会が開催される。

1934年(昭和9年)

室戸台風により艇庫全壊。陸置きしていた国内5m級が、100m先の国道にまで飛んでいったという。

10月20、21日に、第2回全日本A級12ft艇選手権大会開催。主催日本ヨット協会、後援・大阪毎日新聞。コースは柳ヶ崎沖。

1935年(昭和10年)

艇庫再建設工式。琵琶湖帆走学校開設。京大ヨット部BYC内で創立、BYC艇を使用し帆走指導を受ける。同ヨット部は9月にA級ディンギーを3隻建造している。この年の第8回明治神宮大会(11月3日、横浜ヨットハーバー)に、BYCから参加、この年は、多くの行事があった。

1936年(昭和11年)

BYCの吉本善多選手がベルリン・オリンピックへ出場。また、鈴木英氏がドイツより取り寄せた図面をもとにE. Z. (EINHEITS ZEHNER) 級を桑野造船所で建造。E. Z. 艇はBYCのシンボルともいわれる姿を現在に保ち、琵琶湖カインド・レガッタではパス・ファインダーとしてその勇姿を毎年見せてくれる。



↑艇庫前で野球をするメンバー



⇨第2回全日本A級12ft艇選手権大会



↑E.Z.級

1937年(昭和12年)

BYC鈴木英著「帆走叢書III艇型論」発行。

6月13日, BYC後援の下, 同大, 阪大, 京大の3大学対抗定期戦開催。

11月, 第9回明治神宮大会出場。

1939年(昭和14年)

同大ヨット部及び京大ヨット部がBYCから独立する

1946年(昭和21年)

BYC保有艇進駐軍接收——国内5m級及びA級ディンギー12艇が接收された。代償20000円。

8月2日, 島津ヨット部創立。

1948年(昭和23年)

テリーボートと同型艇を3隻, 柿坂工作所にて建造。

1949年(昭和24年)

供出していた国内5m級2隻, A級ディンギー4隻を買い戻し, A級は2隻を立命大ヨット部に, 1隻を大津高ヨット部に譲渡した。

1950年(昭和25年)

ジェーン台風により, 艇と艇庫が吹っ飛んだ。

1951年(昭和26年)

前年壊れた艇庫の再建完成。この年BYC20周年に当る。全日本インター・クラブ・レース(柳ヶ崎)で, 青木弘・吉本哲男組優勝。

1953年(昭和28年)

児玉, 森岡両氏の2隻のシーホースが琵琶湖に進水。

この年, 台風13号により艇庫破損。

1955年(昭和30年)安田貞一郎氏会長就任。

1962年(昭和37年)

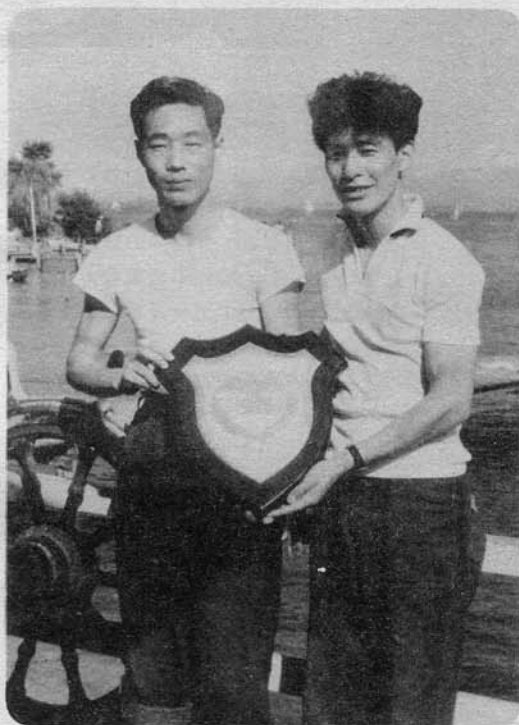
滋賀県ヨットハーバー完成。

1968年(昭和43年)

長谷川英一氏会長就任。

この後もアクティブな活動をつけ, 1972年(昭和47年)にBYC50周年を迎える。そして次の10年を過ぎたが, この10年の間, BYCとして特筆すべきことは, 琵琶湖カインド・レガッタの毎年開催があげられる。このレガッタのおかげで琵琶湖ナンバーが整備されてきたし, ゲート・スタートの積極的な利用, コンピューターの導入などで, 多数艇参加のレース運営におけるノウハウを築きつつあるのだ。

その琵琶湖カインド・レガッタも今年で第10回を迎え7月25日に開催の予定である。



↑全日本インタークラブ・レース優勝の青木弘(左), 吉本哲男の両氏

↓50周年記念式典で

